

## 刊行のことば

16世紀にヨーロッパ人がはじめて来航してから、日本列島に住む人々は、在来の技術や大陸から得ていた知識を土台に、西洋の人やモノ、書物から積極的に多くを取り入れるだけでなく発展・昇華させ、地域社会でさまざまな達成をもたらしていた。明治に入って西洋の科学が日本の学術の正統に位置づけられるようになるまでの、その営みの総体を洋学史と呼ぶ。

洋学史の研究は内外の史料に恵まれ、長い歴史と大きな蓄積を持つ。最近とくに江戸や上方以外の蘭学研究がそれぞれの地域で飛躍的に進展していることに鑑み、研究を志す若い人たちのためにこれまでの成果を反映させた新たな指針が必要であると考え、本事典の編集を企画した。

近代的な学問は西洋に由来すると思われると同時に正しさの根拠を西洋に求めてきたから、我々は自分たちの過去をそのまま振り返るために、あるいは、日本がアジア諸国に先駆けて近代化を遂げた理由を探して、洋学史研究を続けてきた。

しかし近年、植物学・動物学は生命科学へ、冶金術は金属工学を経てマテリアル工学へ、と変貌を遂げ、19世紀の枠組みは次第に過去のものとなりつつある。また、世界情勢の変化により、アジア諸国に対する日本の先進性を何の疑問もなく信じる事ができた時代は過ぎ去ろうとしている。

では、なぜ、今、洋学史なのか。本事典は、学術が近代のさらに先を目指すなかで洋学史研究の意義を問い直しつつ、3つの視点を大切に編集した。

まず、列島の地域社会へのまなざしである。洋学の世界史の特徴は、西洋からの強い働きかけによるのではなく、列島をとりまく人やモノの往来と、それに伴う情報の流通を揺籃とし、住民の草の根的な知識欲をおもな駆動力に、為政者の参画・指導も相俟って、着実に広がっていったことにある。本事典は、津々浦々におけるその豊かな果実を何よりも重視し、それを社会のありようとの関連で見ていく。

つぎに、モノへのまなざしである。人の動きと接触に制限があった時代に、大量の移民や留学などによることなく、おもに輸入品や輸入書籍に触発されて、洋学は発達した。本事典は、技術や知識の媒体としてのモノや書籍にも着目する。

さらに、世界へのまなざしである。人類は、多角的かつ双方向的に技術や知識をやりとりして生きてきた。洋学史もその一端である。本事典では、ヨーロッパから伝えられ中国で漢訳された学知の影響や日本で蓄積されていた学知がどう発信されたかにも意識を向けた。

洋学の内容と社会的なありようは、当時の学問の本流であった漢学と、つねに協調と融合、比較や対抗を重ねながら、形成された。それはかけがえのない先人の歩みであり、本事典が扱う言葉の一つひとつにその刻印が残されている。

現在でも、人間の主体性や次世代の育成という大切なことを守るうえで、地域社会にこそ未来への手掛りがあるのではないだろうか。その手掛かりが、世界との接点を見出し、知識を循環させていく時、既存の学問権威とのあいだに協調と融合、比較や対抗を引き起こし、その向こうにきっと新しい地平を切り拓くことができるだろう。

洋学史を問うことは、今まで築いてきた、そしてこれからの我々の知的土台となるべき、近代日本の学術のあり方そのものを問うことである。21世紀に生きる我々一人ひとりが世界と向き合うために、本事典が少しでも道しるべとなることを願う。